

ひとが投資をするとはどういうことか

「自己形成としての投資」に関する概念分析と価値提案

2025年3月

京都大学大学院文学研究科哲学専修・教授

出口康夫

京都大学成長戦略本部・特定助教

渡邊一弘

株式会社お金のデザイン・お金のデザイン研究所・取締役副会長/ファウンダー

廣瀬朋由

1. 本研究の趣旨

投資や資産形成を、たんなる経済活動にとどまらない人間の営みとして理解しようとするとき、それは個人の生き方や社会のあり方にどうかかわってくるだろうか。自己と幸福にかんする哲学的考察をつうじてこの問いに答えることが、本研究の目的である。具体的には、人びとのもつ幸福観の多様な内実から、個人に固有な「わたし」的価値と、他者と共有する「われわれ」的価値を分節することによって、投資や資産形成といった経済活動がいかんして幸福な人生をまっとうするプロセスのうちに統合されうるか、その理路を明らかにすることを目指す。そうすることで、「わたし」的価値の追求と「われわれ」的価値への顧慮とが互いの実現を促しあうような実践を、ひろく社会に生み出していきたい。

過去におこなった第一期共同研究¹では、「資産形成とは一人ひとりの『しあわせ』を実現する行為である」という考え方を基盤に、「お金」という狭義の経済的価値から、より包括的な価値としての「しあわせ」へのシフトを提案した。そして個人に固有の「わたし」的価値と公共にひらかれた「われわれ」的価値を含む多元的なマトリクスとしての「しあわせ」を定量的に可視化するために、「ライフ・インテグレート尺度」を開発した。

製造業で使われる用語に「部品展開」というものがある。展開とは、製品とその構成要素となる部品の関係を明示し、部品表として整理するための手法である（社団法人日本経営工学

¹ 第一期共同研究は2021年4月から2023年3月にかけて、出口康夫（京都大学大学院文学研究科哲学専修・教授）、大西琢朗（京都大学大学院文学研究科哲学専修・特定准教授）、廣瀬朋由（株式会社お金のデザイン・お金のデザイン研究所・取締役副会長/ファウンダー）によって行われた。その成果はホワイトペーパー「『しあわせ』の再定義と定量的尺度作成のための調査研究 ～個人の価値実現をサポートする金融サービスのあり方を哲学的見地から検討～」として公開されている（<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2023-01-30-2>）。

会, 2002, p. 386)。製品から出発してだんだん小さな単位のパーツへと分解し、構成要素となる部品を特定することを「正展開 (explosion)」という。たとえば、あるモデルの自転車を正展開していくと、フレームやネジなど、それを作るのに必要なたくさんの部品が網羅できるだろう。これになぞらえて第一期共同研究を説明すれば、そこでは「しあわせ」という製品が「わたし」型と「われわれ」型という2つのタイプに区別され、これらがさらに「リスク」「充実感」「人生観」「社会統合」という4つのファクターに分解されるので、ある人の「しあわせ」はつまるところ計8つのファクターに正展開される。それぞれのファクターをどの程度重視するか考えることによって、自分の「しあわせ」のいわば内部構造が可視化されるというわけである。

しかし、ライフ・インテグレート尺度によって自分の価値観の中身を認識できたとしても、そこから資産形成を含めた実際の行為へと人々が足を踏み出すためには、なお無視できない隔たりが残っていた。このギャップを埋めるため、今回の第二期共同研究では、「人が投資をするとはどういうことか」という根源的な問いに立ち返って考察を進めていく。投資をする、資産を形成する、という「行為」の本性に目を向けることにより、人がいかにして多元的な価値の認識からひとつの行為実践へと駆動されるのかを明らかにしたい。

先ほどの正展開とは逆に、部品から出発してそれが組み込まれている製品を特定することを「逆展開 (implosion)」という。ある品番のネジから逆展開することによって、それを共通して使用する複数のモデルの自転車が特定できる。製造業では部品の在庫を切らさないよう管理したり効率的に使い回したりするためにこの手法を用いるが、今回の共同研究では、重みづけされた8つのファクターからいわば逆展開して「しあわせ」という完成品のかたちを導くためのプロセスを検討する。ここで機械製品の場合と異なるのは、要素からしあわせを抽象的に再構成しただけでは行動を駆動しないということだ。他ならぬ自分のものとして、内実を伴った「しあわせ」を描き出す必要があり、そのための仕掛けが「ナラティブ」である。第3節で論じるように、本研究ではこのナラティブという道具立てを介して統合的な価値を自己とむすびつけ、「しあわせ」という完成品へと導く実践までを視野に入れる。

お金のデザインのような金融機関が顧客や社会に貢献しようとするとき、価値観と行動の橋渡しをサポートするのは必要かつ重要な仕事である。また哲学者にとって、認識と行為の相互作用の問題を実際の社会的文脈に適用して考察することは、学術的に豊かな収穫が期待できる有意義な挑戦である。第一期と同様、資産形成をめぐる問題に取り組むにあたり、お金のスペシャリストである金融機関がアカデミズムに属する哲学者とコラボレートするのは、異色なようで実は自然な流れによるのである。

人びとが主体的な経済的意思決定をおこない、その豊かな果実を享受するための指針をもたらしことも本研究の願いである。しかし本研究の射程はそこに留まらない。むしろそうした具体的作業課題をつうじて、個と社会が有形無形の資産を媒介として働きかけ合う論理と、両者が価値的に共存し合うための規範について考察を深めることを目的としている。そのうえでまずは出発点として、いわゆる「ゴール投資」という考え方に潜むパラドクスをつうじて、人間の行為と目的をめぐる問題を検討してみよう。

ゴール投資のパラドクス

投資を長期にわたり安定して継続するためには、将来の明確な目標すなわちゴールを設定する必要がある。こうした考え方はゴールベース・アプローチあるいはゴール投資などと呼ばれ、資産運用においてしばしば推奨されている。行き当たりばったりの判断よりもきちんとした計画にもとづく意思決定が有効なのは、投資に限った話ではない。地に足のついた計画を策定しようと思えばまず目標をはっきりさせなければならないことも、また自明であるように思われる。それゆえゴール投資の考え方そのものは、直感的にも受け入れやすく、適切な条件の下ではうまく機能することもあるだろう。

しかし実際のところ、将来の目標に強くコミットし続けることは難しい。実現することに大きな価値があると頭では理解していても、時間の経過とともに、目標が自分の心と体を鼓舞しなくなってくる。これもまた投資に限った話ではなく、受験勉強やダイエットなど、誰しも苦い経験とともによく知っているはずの人間にかんする事実である。

ある出来事が生じる時期が遠い将来であればあるほどその価値を低く見積もってしまう度合い、すなわち時間割引率²は、人によって異なることが知られている。時間割引率の大きさは、行動を先延ばししたり継続的な努力を断念したりする傾向につながりうるため、個人の意志の弱さの問題として捉えられがちである。しかし目標にコミットし続けることの難しさは、とりわけ資産運用の場合、時間の経過に伴う生活環境や価値観そのものの変化、さらには市場の変動などから、複合的かつほぼ不可避免的に生じる問題である。

それゆえしばしば次のような事態が生じる。当初の目標と現在の状況とが大きく隔たるにつれ、そこで顕になったギャップそのものが、投資を続ける意欲と自信を失わせてしまう。すると堅実な計画のために設定した目標の存在がかえって長期的な資産形成に悪い影響を与える。あるいは、目標の達成にこだわるあまり投資が自己目的化してしまうと、将来の生

² ここでいう時間割引 (time discounting) とは、「報酬や損失が生じるタイミングが現時点から遠ざかることによって、それらの価値が減弱して評価される現象」(高橋, 2017, p. 236) のことである。

活を豊かにするために立てたはずのゴールが不安やプレッシャーをもたらすだけになり、かえって幸福な人生を妨げる要因となってしまう。このような逆説的な事態を「ゴール投資のパラドクス」と呼ぶことができるだろう。

このパラドクスから逃れるにはどうすればよいのだろうか？ひとつには、インデックスファンドへの投資に関連して示唆されることがあるように、変化を気にしすぎず「放っておく」という戦略が考えられる。しかし子どもの教育費にせよ老後の生活費にせよ、人生の「備え」として確保しておきたいお金をリスク性の金融商品に投資する以上、そのような態度を取り続けられる人はそう多くないだろう。またこうした「ほったらかし」戦略では、形成した資産を自分の人生においていかに活用するかという視点が抜け落ちてしまう恐れもある。

パラドクスを解消するもうひとつの可能性は、忘れてたり放っておいたりすることとはまた別の方向にある。将来に設定した明確な目標に向けて一心不乱に（つまり努力していることすら忘れて）進んでいく直線的なイメージで資産形成を捉えるのではなく、投資という行為をつうじて自分自身をよりよく理解し、そのことが当初の仮設的な目標を修正ないし実質化していくという、目的と手段が互いを充実させ合うようなサイクルの連続として考えるのである。

納得も得心もできる資産形成とは

このようなサイクルにおいて、投資は単なる目標達成の手段ではなく、それ自体が意味と価値をもつ行為へと転じる。ただし、ここで言う「投資自体に意味がある」とは、投資を自己目的化することではない。それはむしろ、資産形成をつうじて自己陶冶の経験を積むことである。「陶冶」とは、その文字通り、生まれもつた能力や素質を円満に育て上げることを指す。資産形成が単なる目標達成の手段ではなく、自己理解を深めるための場となると、投資という行為は自分自身を見つめ直し、人生をより豊かにするためのプロセスへと変わるだろう。

しかし、どうすればこのような安定した資産形成のサイクルを実現できるのだろうか。自分なりの目標を設定し、現状と未来を合理的に把握する力を養うことも、第一歩としては有用であろう。加えて、経済システムや金融商品の基礎知識を身につけることも必要かもしれない。しかし、長いスパンで見れば、必ず予想外の出来事に直面する。合理的と信じた予測が裏切られ、自らの判断の限界を思い知る瞬間は避けられない。それでも、その「思い通りにならないこともある」という現実を、頭だけでなく直感のレベルでも受け止めることが、長期的な安定をもたらす鍵となる。理性で納得すると同時に、身体的な得心によって自分の投資行動を内面化したとき、資産形成は単なる手段を超えて自己陶冶のプロセスになる。

スナップショットをつなぐストーリー

第一期共同研究で開発したライフ・インテグレーター尺度は、ある人の幸福感について、特定時点での「現状」と「理想」をスナップショットとして可視化し、そのギャップを埋めるための行動を促すツールである。しかし、ある時点における状況が可視化されたとしても、そこで促される行動が単発的または短期的なものにとどまり、持続的な効果を生まない可能性がある。また、時間の経過とともに状況や価値観が変化し、理想そのものが移り変わることもあるだろう。

この問題へのひとつのシンプルな解決策は、ライフ・インテグレーターを使った「しあわせ診断」を定期的実施し、その都度「現状」と「理想」、そしてギャップを埋めるための行動を見直し、アップデートすることである。しかし、これを単なるスナップショットの集積として扱うだけでは、幸福の実現に向けた行為が短期的なものに終始し、長期的な行動の連鎖や持続的な習慣形成には結びつきにくい。

瞬間的な判断を求められる現実を乗り切ろうと思えば、あらかじめ自己形成の方向性を身体に染み込ませておく必要があるだろう。そのためには離散的なスナップショットを接続し、それらを連続的かつ統合的に捉える視点が求められる。具体的には、個々のスナップショットをつなぐストーリー、ないしナラティブ（物語）を、身体で理解できるようになることが重要となる。このストーリーは、しあわせや価値観を軸に、時間を超えて「自己」を形成していくプロセスそのものである。資産形成を自己形成の一環として捉えたとき、短期的な行為は長期的な目的に向けた持続的な方向性を持ち、より深い意味と価値を帯びるのである。

2. 資産形成と自己形成の循環的關係

前節で提案したように、資産形成は単なる経済的活動にとどまらず、自己形成と深く結びついた行為として捉えることができる。このセクションでは、自己形成と資産形成の関係について、両者の循環的な接続のあり方を掘り下げる。そのために、人間が何かを「形成する」＝「つくる」意味そのものに立ち返り、資産形成という「行為」の本質と、その過程が自己形成に与える影響を原理的な次元から考察していく。

自己形成と資産形成についての素朴な理解

自己形成のプロセスは、短期的には、新しい知識やスキルを獲得し、自らの信念体系を更新しつつ拡大していくことである。また長期的には、目標、価値観、アイデンティティといった、自己の大きな枠組みを築き上げていく過程でもある。資産形成はその過程を支える経済的基盤を築くことであり、自己形成を長期的なスパンで考えようとするほど、経済的な安定性ないしリスク分散の視点が重要になるだろう。自己形成と資産形成という二つが互いに作用し合うことで、自己の成長が資産形成を促し、資産形成がさらに自己成長を支えるという、ポジティブな循環が生じる。

このような説明はおそらく多くの人にとって理解可能であり、資産形成において考慮すべきことの側面を捉えてはいる。他方でここにおいて描かれている関係は、自己や資産が成長し続ける好循環の部分のみを都合よく強調しているようにも思われかねない。実際、自己形成にせよ資産形成にせよ、長期的なスパンではパフォーマンスが低調に陥ったときの持続性こそが肝要である。そこで以下では、人生にせよ資産にせよ人間が自らの意志と技量を以てなにかを「つくる」ことの意味にまで立ち戻り、より根本的な視点から、自己形成と資産形成の循環的接続について考えてみよう。

作られるものが作るものを作る

京都学派の哲学者・西田幾多郎は、「歴史的な身体」と題された昭和12年の講演において、人間の制作活動の本質を「作られたものが作るものを作ってゆく」（西田, 2020, p.221）と表現した。これは、作る主体と作られた客体が相互に影響を与え合う、循環的な関係を示している。たとえば芸術家の創作活動を考えてみよう。芸術家は自身の内面的な感性や思考をもとにキャンバスに筆を走らせ、形ある「作品」を生み出す。しかし、その瞬間に生み出された作品は、芸術家から離れて独立した客体となり、視覚的・感覚的に作者自身に働きかける。次なる創作の方向性や表現は、この作品の存在が前提となって構築される。

この循環は芸術に限らず、あらゆる人間の「はたらき」に通じる。人間が目的をもって自らの機能を実現するどのような過程においても、ある行為や選択が形として現れ、それが再び自己の思考や行動に影響を与えていく。つまり、主体としての人間は世界に働きかけて何かを作り出し、その「作られたもの」が今度は主体に返ってきて、新たな「作る」行為を規定する。この循環的なプロセスこそが、西田が示す「作る主体と作られた客体」の動的な関係であり、人間の制作活動の根底にある論理なのである³。

³ 後期の西田は、身体が制作的であることに知識の基盤をも求めた。すなわち、われわれは身

資産形成もまた、西田幾多郎のいう「作る主体と作られた客体の相互作用」に通じる行為として捉えることができる。資産形成の過程を西田の論理に当てはめると、まず私たちは労働によって得た資金を素材とし、創意工夫や選択をつうじて資産を作り出す。このとき資産には自分自身の経験や信念や価値観が、他者や社会から受け継いだそれらと不可分に結びいて編まれた、「わたしという物語」が埋め込まれることになる。この資産はいちど形として現れると、独立した客観的存在となり、その後の経済的主体としての自己に影響を及ぼし、自己を再び「作る」ものへと変貌するのだ。

第3節で詳述するように、「わたしという物語」は一人称的な視点から編まれるナラティブであり、自分の欲求や価値観、世界観、そして未来への予測が反映されている。しかし、一人称的と言ってもそれは単声的（モノフォニック）ではなく、社会的背景、学問的知識、そして他者の視点が織り交ざった多声的（ポリフォニック）なものでもある。資産という形で客体化されたこのナラティブは、単なる静的な結果ではなく、その後の自分の行為や選択の可能性を規定し、人生の方向性を再構築する基盤となるのである。

この「ナラティブを媒介とした資産と主体の相互制作」の連続的な循環こそが、自己の成長と再発見を促し、資産形成を単なる経済的行為にとどまらない、自己形成のプロセスへと深化させる。資産を作ることで主体が形成され、その主体がまた新たな資産を作るのである。

投資と「ゴール」の関係をどう考えるか

ゴール投資のように、明確な目標に向けて効率的に突き進む考え方と、本研究が提案する資産形成と自己形成をリンクさせる考え方は、一見対立するように見える。しかし、これは人間の行為をどう捉えるかという視点の違いに過ぎない。この点で参考になるのが、アリストテレスが示したキーネーシス（運動変化）とエネルゲイア（現実活動）の区分である⁴。

キーネーシスは、外部の目的に向かう行為である。行為にはなんらかの目的があり、その目的が行為の「外」にある場合、目的を達成することで初めて行為が完結する。たとえば、建築という行為の目的は家を建てることであり、家が完成するまで行為は続き、その目的が果たされない限り行為自体も未完とみなされる。同様に、歩くという行為も、買い物をするた

体をもって世界に働きかけることにより経験的な知識を得るのであり、このことを西田は「行為的直観」の概念によって説明しようとした（cf. 野家, 1994）。

⁴ この区別を論じているアリストテレスの主なテキストは、『形而上学』（アリストテレス, 1968）第9巻（Θ巻）第6章および『ニコマコス倫理学』（アリストテレス, 1973）第10巻（K巻）第3章・第4章である。

めに店に向かうのであれば、店に到達することが目的であり、到達しなければその行為は達成されない。また、学ぶという行為も、特定の知識を身につけることが目的であり、成果が伴わなければ「学ぶ」という行為は成就していない。このようにキーネーシスとしての行為は、目的の達成がその価値を決定する。

一方で、アリストテレスは目的が行為の「内」に含まれるタイプの行為も存在すると述べており、それがエネルギーである。この場合、行為を遂行すること自体で目的が実現されている。たとえば、「見る」という行為は、見ている瞬間に目的が達成されており、外部に結果を求めるものではない。「考える」という行為も同様であり、何かについて考えることそのものが目的を含んでいるため、途中で止めたとしても、それまでの「考える」という行為自体は成立している。このように、エネルギーとしての行為は、それが行われる過程において価値が実現される⁵。

ただし、外形的には同じ行為でも、キーネーシスとして捉えることもエネルギーとして捉えることもできる場合がある⁶。たとえば「歩く」という行為も、目的地に向かうのであればキーネーシスとなるが、散歩のように行為そのものを楽しむ場合はエネルギーとなる。途中で行き先が変わったとしても、散歩そのものが気晴らしの目的を果たしていれば、それで完結しているといえる。また「学ぶ」ことも同様で、受験のためであれば成果が伴わなければ未完とされるが、学びの過程自体に意味や楽しみを見出すならば、その努力や経験自体が目的として実現されていることになる。行為の目的が外部にあるか内部にあるかという視点の違いが、キーネーシスとエネルギーの区別を生み出すのである。

資産形成も、アリストテレスの示したキーネーシスとエネルギーという二つの視点から捉えることができる。まず、ゴール投資の考え方は資産形成をキーネーシスとして見た典型例である。ここでは、資産形成の目的は行為の「外」にあり、たとえば将来の家や車の購入、老後の充実した生活といった明確なゴールに向かって行われる。この考え方では、資産形成の過程でゴールに到達できなければ行為は「未完」とされ、計画の変更や中断も「失敗」と見なされる。目標を持ち、その達成に向けて努力するという単純明快な構図は理解しやすく、評価もしやすい点が大きな利点である。他方で行為の価値を将来の目的達成という一点に集約させることは、現在の幸せを将来の目標に従属させるという意味で、我慢を強いられる

⁵ 鬼界（2011）はキーネーシスを「目的達成行動」、エネルギーを「能力の発現活動」というふう呼び分けている。

⁶ キーネーシスとエネルギーが排他的区別として成立するかという点は、アリストテレス研究者の間で問題となっている。たとえば（Ackrill, 1965）は、「聴く」は「見る」と同様エネルギーと解することができそうだが、「（交響曲を）聴く」はキーネーシスと捉えることもできることから、アリストテレスによるそれぞれの行為の区別に疑問を投げかけている。三浦（1997）はこの問題の解消を試みている。また藤澤（1980）は、この区別によってアリストテレスが表そうとしたエネルギーの哲学的意義を「活動の論理」の提示にあるとしている。

ことにもなる。

しかし、資産形成の意味をエネルギーとして捉え直すことも可能である。この場合、資産形成とは単に目標達成のための手段ではなく、その行為自体に目的が含まれていると見なされる。たとえば、現在の収入をもとに、今と未来の消費をどのように配分するかを考え、計画し、実行する過程そのものが価値をもつ。投資や貯蓄をつうじて、お金の流れや時間的なバランスを把握し、人生設計を遂行する行為そのものが充実した営みとして意味を帯びる。そこでは悩みや苦勞も伴うが、それらも意味あるものとして経験される。もちろん、エネルギーとしての行為にも目的は存在する。しかし、アリストテレスによれば、人間の生の目的（テロス）は、生涯の終局にあるのではなく、「生き方」として継続的に実現されるものである。たとえば、100メートル競争でのゴールの瞬間が重要なのではなく、競技前の練習からはじまりゴールに至るまでの走りそのものが目的を達成しているプロセスとなるのである。

キーネーシスが外部のゴール達成に焦点を置くのに対し、エネルギーとしての資産形成は現在の活動や選択そのものを肯定し、意義づける。この視点を取り入れることで、資産形成は時々の「結果」に縛られず、今この瞬間の自己理解や自己形成のプロセスとして捉えられるようになる。単なる経済活動にとどまらず、人生そのものの質を高めるための営みとして投資を位置づけることができるのである。

3. 自己形成へのナラティブ・アプローチ

前節で紹介した「作り作られるものとしての自己」という発想においては、言葉による自己理解と自己表現、すなわち自分についての「物語＝ナラティブ」が重要な役割を果たしていた。そこで本節では、われわれの自己把握において語りやナラティブがどのように関係するのか、まず概念的に掘り下げる。そこからさらに、資産形成においてナラティブがどのようにかかわっていくか、前節での議論に加えてより実践的な観点から説明する。

物語的自己（ナラティブ・セルフ）とはなにか

「ホモ・ナランス (homo Narrance)」という言葉が示すように、「物語ること」は人間を人間たらしめる本質的な行為である (Fisher, 1984)。野家 (2007) もまた、「自己の行為について『理由』と『責任』を物語れる能力」を、人間の本質として位置づけ、生物学的な「ヒト」と区別される「人」の特徴を描き出そうとした。このように、「自己」を永遠に固定された存在ではなく、語り手の視点から再編成される「物語」として捉える視点は、現代哲学

における自己論の重要な潮流となっている⁷。

われわれは自分の生涯を振り返ろうとするとき、過去の出来事、たとえば1970年に家族と大阪万博におこなったとか、1985年に結婚したとかいう個々の事象を、数直線的な年表の上に整理して並べることが可能ではある。このような俯瞰的な捉え方は、たとえば歴史上の人物の生涯について理解しようとするときには有用であろう。しかし、年表上に並べられた出来事の集合は、ただ事実を羅列したに過ぎず、そこに出来事の因果関係や意味づけが欠けている。そして、やはり他人の人生を端から覗いたような、断片的で平板な眺めである。そこには、当事者がその時々にした時間の手触りが欠けているのだ。

他方でわれわれは、「語り手」として自分という物語を紡ぐことで、人生に起こった様々な出来事を一人称的な視点から捉え直すこともできる。このような語りとしての自己理解は、年表による自己理解と比べ、ある点において明らかに豊かな内容をもっている。その差分を端的に「自己性」と呼ぶことができるだろう。自らの口から語られる出来事には、それが経験されたときの色彩が伴っている。そしてその質感は、私秘的なものだ。むろん記憶に脚色や誤りが付け加わることもあろう。しかしむしろそれゆえにこそ自分語りのナラティブは、一覧に整理された情報をもたらす以上の自己理解を、語り手自身にもたらすことができる。

ポール・リクールもまた、物語が自己理解に果たす重要な役割を強調した哲学者である。彼は著書『時間と物語』第三巻の中で、「主体は、彼が自分について自分に語る物語において自己認識する」(Ricoeur, 1985, p. 357 久米訳, 1990, p. 450) と述べている。この言葉は、自分の人生や来歴を物語として語ることが、単なる記録を超えて、自己同一性を構築する行為であることを示唆している。つまり、出来事の羅列では欠けがちな「生きた時間の手触り」や「自己性」が、語りという形式をつうじて初めて浮かび上がるのである。リクールの思想は、俯瞰的な年表と語り手としての視点との違いを際立たせ、私たちが自らの経験をいかに物語るかが、自己を理解する上で深い意味をもつことを教えてくれる。

リクールは物語と自己理解の関係について、回顧的な「自己語り」とはまた別の側面があることも指摘している。それは自分が「聞き手」となる他人の物語が、自己認識に与える影響である。詩や小説といった文学作品のテキストなど、誰か別の語り手による物語の舞台設定や筋、そして世界観を、自分の経験や価値観に照らし合わせながら読み解いていくこと。

⁷ 以下本節で論じるリクールとマッキンタイアの他には、Taylor (1986)、Carr (1986)、Dennett (1991)らがこの潮流の中で重要な位置を占めている。デネットの「ナラティブの重力中心としての自己」については出口 (2024) が批判的に論じている。哲学以外でも、20世紀後半以降の人文社会科学では「物語 (narrative)」への注目が高まり、関連研究が蓄積している。たとえば心理学においても、自己に対する物語論的アプローチが展開されている (McAdams, 1985; Bruner, 2002)。

リクールによればそのような読解は、作品への反照をつうじて間接的に、しかしより深く自己を理解することなのである (Ricœur, 1990 久米訳, 1996)。このように、リクールの議論は、自ら語る物語だけでなく、他者の物語を受け取り、そこに自己を映し出す行為をも含めて、物語が自己理解に果たす多層的な役割を浮かび上がらせている。

リクールの議論は物語がもつ力についてまた別の視点に気づかせてくれる。自らの生涯を回顧的に反省することが自己理解につながるのは、過去の事象に主観的な質感を取り戻すからだけでなく、それら個々の出来事や経験を「統合」する力をもつからでもある。古代ギリシアのアリストテレスは、人間の生が「善」という目的の下に統一されていなければならないと考えた (アリストテレス, 1973)。われわれが日々おこなう具体的な行為や実践も善をもたらすのが、それらはいくまでも限定的な善であり、有徳な実践のもたらす結果が善と見なされるのは、より完全な善に奉仕するからである。すなわち日々の実践がもたらす限定的な善を有意義なものとして理解するには、その行き着く先に「人生全体の善」を構想せざるをえない。このようにアリストテレスは考えた。

他方で近代の私たちは、自分の人生をいくつものステージに分解し、それらの相互関係を見失ってしまっている。アラスデア・マッキンタイアは『美徳なき時代』の中でこうした状況を嘆き、人生をひとつの全体として見ることの復権を試みる。そして、人生をバラバラな要素の集合ではなくひとつの統一体 (unity) として捉えるためには、自己を物語の様式で考える必要があるとする。なぜならマッキンタイアによれば、「人格の同一性とは、物語の統一性が要求する登場人物の統一性によって前提されている同一性に他ならない。そうした統一性がなければ、物語が語られうるような主体は存在しない」からである (Macintyre, 1984, p. 218 篠崎訳, 1993, p. 267)。つまり時間をつうじて自分が自分であり続けること、すなわち人格の同一性は、自分の人生という物語において同一の主人公が立てられることによって担保されている、というわけだ。しかし、人生を統一体として眺めるために、なぜ物語の形式が必要とされるのだろうか。それは、物語が個々の出来事や行為を統合し、それらに文脈を与える枠組みとして機能するからである。

マッキンタイアによれば、人間の行為とその意図は、なんらかの文脈ないし舞台 (setting) なしには理解することも説明することもできない。たとえば、机に向かって何かしている人を見かけて「彼は何をしているのだろうか」と問うとしよう。この問いに対して「文章を書いている」「レポートを完成させている」「授業の単位を取ろうとしている」など様々な答えが可能であろう。これら等しく正しい答えの相互関係は、より長期的な意図の下により短期的な意図を関連づけることによって、すなわち文脈を与えることで、初めて理解可能となる。またそれぞれの答えが行為の説明として成り立つには、「大学の授業ではレポートの提出によって単位が認められることがある」という社会的・制度的な背景が前提されていなければならない。私たちの日々の振る舞いとそれらの相互関係は、自分にとっても他人にとっても、

私たちそれぞれが生きる物語という、より広い文脈を基にして理解可能になるのである。

マッキンタイアの議論は、個人の人生という範囲を超えて、共同体の文化や伝統、そして歴史という視点へとわれわれを誘う。人間の行為が広い文脈の中で理解可能になるという指摘は、私たちが他者と繋がりながら生きているという事実を示している。私の人生の物語は、他人の物語と無関係には語られない。少なくとも同じ共同体や文化の成員どうしであれば、それぞれが語る物語は部分的に重なり合い、共有された社会的背景や制度的枠組みを前提としているからである。マッキンタイアは「私の人生の物語は常に、私の同一性の源である諸共同体の物語の中に埋め込まれている」(Macintyre, 1984, p. 221 篠崎訳, 1993, p. 271)と述べ、私たちの自己理解が共同体の歴史や伝統に依存していることを強調する。この視点に立てば、「私はある歴史の一部として自己を経験している」(Macintyre, 1984, p. 221 篠崎訳, 1993, p. 271)という考えにも納得がいく。つまり、個人の物語は孤立したものではなく、歴史や文化の大きな流れの中で相続された要素に基づき構築されるものである。このように、物語は自己だけでなく共同体の文脈の中に位置づけられることで、初めて全体としての意味をもつのである。

直感的に把握できる自己像

物語的な自己理解が投資や資産形成においてどのように役立つのだろうか。本稿の第1節でも触れたように、短期的な利益を追求する投機ではなく、自己の成長や価値観の変化と調和した長期的な資産形成を目指す場合、その方針や原則を単に理性的に理解するだけでは不十分である。経済の成長性やインフレリスク、人生のモデルケースに合わせた将来設計など、頭では理解していても、投資に気が進まない人は多い。他方で老後不安や年金不信といったネガティブな情報に駆り立てられた投資が、長い人生において、安心感や幸せにつながるだろうか。本当に必要なのは、そうして頭で理解した情報を直感と感情のレベルでも自分ごととして得心することである。このような腹落ちが得られて初めて資産形成につながる内発的な動機が生まれ、腰を据えた継続が可能となる。

そのような直感的な得心をもたらすのが、物語やナラティブの効用である。私たちは自分のこれまでの人生を振り返るとき、自然と物語の形式で過去の出来事を再構成する。そこでは、全ての出来事を年表のように網羅するのではなく、重要な瞬間が取捨選択され、現在の視点から豊かに彩色される。些細な出来事でさえ、時には深みのあるサイドストーリーとして浮かび上がることもある。このように形成された自己物語は、私たちが判断を自動化し、行動を習慣化する手助けとなり、結果として投資や資産形成に必要な直感的な自己理解をもたらす。

そして、この物語の効用は過去を振り返るときだけでなく、未来を思い描き、将来に向けた人生設計を立てるときにも発揮される。自己物語をつうじて、自分が何を大切にし、どのような未来を目指すのかが明確になることで、長期的な資産形成に向けた内発的な動機が生まれる。将来に思い描く出来事は、まだ実現していない希望や可能性であるかもしれない。しかし、それらが自分なりの価値観や生き方を反映したストーリーであるとき、それは単なる計画ではなく、本来のライフプランとなる。そのような自分発信のナラティブが、資産形成にリアリティを与え、未来に向けた前向きな行動を促すのである。

すでに触れたように、自分の物語を「語る」ことだけでなく、他者の物語を「聞く」ことも、私たち自身の自己理解に影響を及ぼす。物語の共有は人々を互いに結びつける。この点は、ロバート・シラーが『ナラティブ経済学』で指摘した、物語が経済現象に与える影響ともかかわる。シラーは「ナラティブ」を、「社会や時代について説明や正当化をおこなうための物語や表象」と定義し、その中には市井の人々の会話、歌、ジョークといった日常的な要素も含まれるとした（Shiller, 2019, xi 山形訳, 2021, pp. 4-5）。これらのナラティブは人々の間で伝播し、時には「ヴァイラル (viral)」となって広範に拡散し、経済活動に長期的で大きな影響を与えることがある。その力の源泉は、こうしたナラティブが人々の間に情動的な共鳴を生み出し、共通の理解や行動を促す点にある。このように物語を通じた自己理解は、他者の意見や社会常識を自然に取り込み、ひとりよがりではない判断を形成する基盤となる。そうすることによって資産形成を、社会的文脈に根差したものへと昇華させる力をもつのである。

このように物語的な自己理解は、資産形成を感情と直感のレベルで納得できるものに変える。過去を振り返り未来を描く中で、自分の価値観や生き方を反映したストーリーを形成することで、資産形成が単なる計画ではなく、人生の一部として位置づけられる。また、他者の物語を共有することで得られる広い視点は、個人の判断をより社会的文脈に根ざしたものへと導き、持続的で意義深い行動を支える基盤となるのである。

資産形成を支えるナラティブとは

ナラティブがどのようにして長期的な資産形成を支えるか、以下ではひとつのアプローチを提案する。まずすでに触れたように、ナラティブには自己についての回顧的ないし展望的な語りという意味だけではなく、「社会や時代について説明や正当化をおこなうための物語や表象」といった、より広い意味もある。後者の意味でのナラティブのうち、投資や資産形成にかんするものは世間に多く流通しており、たとえば本稿冒頭で言及した「ゴール投資」という考え方も、そのような投資にかんするナラティブの中で伝播力の高いもののひとつであると言えるだろう。

資産形成を「自己形成の物語」として捉える本稿の言説自体もまた、人々の投資に対する態度に影響を与えるひとつのナラティブである。同様に、資産形成を制作行為と見なし、「人間は作るものによって作られる」という視点や、資産形成が単なる未来への準備ではなく、その継続的な遂行の中で目的を実現していく行為だという見方、さらには個人の価値観も他者や共同体とのつながりの中で構成されるといった洞察も、投資の意味を広げる重要なナラティブである。これら資産形成に対する「哲学的」ナラティブはある種の「気づき」として機能し、投資を単なる手段ではなく、自分自身の幸福や価値観と結びつけ、納得できるお金との付き合い方へと人びとを導く。

もちろん、本研究が提示する物語的アプローチは、あくまで投資に対する思考の枠組みを提供するものにすぎない。人々の投資に対する態度は、個々の認識や価値観によって異なり、単一の解釈に収まるものではないからだ。そもそも、自分にとっての幸福や価値観を明確にする作業は、多くの人にとって負荷が高く、漠然と感じられがちである。そのような可視化の手助けとなるのがライフ・インテグレーター尺度であり、現状と理想のギャップを捉え、具体的な行動へと導くツールとして機能する。この枠組みをつうじて、自己の幸福観と資産形成を結びつけ、より納得感のある投資へと進むことが可能になる。

すでに見たように、ライフ・インテグレーター尺度は、「わたし」型幸福と「われわれ」型幸福という2種類の幸福観と、幸福を構成する4つのファクター（リスク・充実感・人生観・社会統合）を掛け合わせた8つの項目から成る。この尺度は、自分の価値観を単に可視化するだけでなく、4つのファクターごとに「わたし」志向か「われわれ」志向かという幸せの方向性を見つめ直す機会を提供する。そして、それらを総合的に捉えることで、自分自身の認識を再調整し、納得感のある人生設計や資産形成への道筋を示す助けとなる。

資産形成は、必ずしも現在の楽しみや充実を犠牲にして将来に備える行為ではない。それは、お金という観点から自分の将来像を描き、その実現のためにどのような人生経路があり得るのか、どう進みたいのかを考え、自分の認識や価値観を調整し、再構築していくプロセスでもある。しかし、ここで難しいのは、価値観が社会全体で多様であるだけでなく、ひとりの個人の中にも複層的に存在するという点だ。たとえば、ESG投資や社会的責任投資という言葉に馴染みがなく、環境問題や社会問題が遠いものを感じられたとしても、それが自己中心的な態度とは限らない。その一方で、競争に勝つことよりも他者を思いやり、喜びを共有することで深い心の安寧を感じる場合もあるだろう。こうした一見矛盾するよう見える価値観が共存するのが人間という存在であり、その多層的な価値観を丁寧にすくい上げることで、より納得感のある資産形成の道筋が見えてくるのである。

しかし同時に、自分の中に混在する幸福観の様々なベクトルに気づき、それらを合成した向きを見つめ直すことは有益だろう。「わたし」と「われわれ」、個人的価値と社会的価値とい

った要素が、自分の中でどのようなバランスを保っているのかを認識し、必要に応じて再調整することは、自己形成そのものにつながるからである。この作業は一度きりのものではなく、人生の進展に応じて何度も微調整を重ねていくものだ。なぜなら、自分の信念体系や価値体系は固定されたものではなく、環境や経験に応じて柔軟に組み替えられていくからである。このような調整のプロセスこそが成長するということであり、自分自身を形作り続ける営みと重なる。そして、この自己形成の過程が資産形成に深く結びつくことで、単なる経済的目標を超えた充実感や納得感が生まれてくるのである。

それでは、ライフ・インテグレーター尺度によって可視化された幸福観と、物語（ナラティブ）との関係はどのようなものだろうか。人体模型にたとえるなら、4つのファクターを掛け合わせて抽出された幸福観は骨格模型にあたる。骨格は構造を理解するには便利だが、そこから生きた人物像を実感するのは難しい。これに肉付けをするのがナラティブである。物語は、単なる数値や構造の羅列にとどまらず、幸福観に感情的な輪郭と直感的な理解を与える。ブロンズ彫像が具体的な人物像を視覚的に伝えるように、ナラティブは幸福観を包括的に表現し、複層的な価値観に意味とリアリティをもたらすのである。

本研究では、生成 AI（ChatGPT）を用いてこうしたナラティブを試験的に作成した。具体的には、ライフ・インテグレーターの8項目それぞれについて現状と理想を示す16項目を設定し、「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」までの5段階で回答する質問文を作成した。これによって回答者の幸福観を可視化し、そのパターンをもとに資産形成に役立つ人物診断を生成 AI に指示した。さらにプロンプトでは、価値観や幸福観を直感的に把握でき、イメージを膨らませやすいナラティブとなるよう細かな条件を設定し、描写が過度に詳細にならないよう調整をおこなった。こうして、幸福観の骨格に豊かな物語の肉付けを行い、直感的理解を促す人物像のナラティブが得られた。

先に述べたように、生成 AI による人物像のナラティブは過度に細かい描写を避けるよう配慮した。その理由は、自分自身の物語を構築する主体は本来的に回答者自身であり、AI が生成するアウトプットはあくまで素材に過ぎないからである。ふたたび人体模型の比喻を用いれば、過度に精巧な彫像を与えられると、人はそのイメージに囚われてしまい、自らの想像力を働かせて自己像を膨らませる余地が失われてしまう。適度に抽象化されたナラティブは、自己理解を促すための「余白」として機能するのだ。

また、生成 AI を活用する意義は、個人の恣意性を抑えつつ、集合知に基づく広がりのあるナラティブを生み出せる点にもある。自己の幸福観や価値観を明確に把握し、正確に言語化できる人はそう多くない。なぜなら、人間の価値観や欲望には、無意識のうちに他者の影響が反映されていることが多く、自己と他者は相互に絡み合いながら形成されていくからで

ある。

この意味で、自分自身の物語を作り上げる際に他者のストーリーが組み込まれるのは、ナラティブの本質に即した自然な自己語りの方法である。生成 AI が提供する人物像のナラティブは、そうした他者の視点を適度に取り入れつつ、自分自身のストーリーを再構築する助けとなる。

4. 投資の公共的性格と「善きしあわせ」

近年、エシカル消費や ESG 投資など、経済活動においても社会課題への道徳的配慮を求める動きが高まっている。他方で woke capitalism（ウォーク・キャピタリズム；社会正義との共存を志向する資本主義）という言葉が「偽善的・政治的イデオロギーの押し付け」といったネガティブな含意とともに使われることからわかるように、SDGs のメッセージやインパクト投資の理念をただのお題目、ないし「きれいごと」として忌避する傾向も少ない人びとの間に存在する。本研究ではライフ・インテグレータの活用をつうじて「わたし」的な価値と「われわれ」的な価値のリバランスする方法を提示してきたが、ここでいま一度、自分のエゴイスティックな経済的利益追求だけではなく、社会性・公共性を踏まえた資産形成というものがいかにして可能かという問題を掘り下げておこう。

経済活動における利己性や利他性を念頭に、本稿第 2 節で論じた「自己形成としての投資」を思い起こすと、その言葉から容易に想像されるのは、いわゆる「自己投資」かもしれない。預金にせよ有価証券の購入にせよ、余剰資金を有形資産に変換して持ち続けるのではなく、資格取得や健康増進や人脈づくりといった目的に向け、自分の能力を伸ばさせるための環境整備に使用する。物語的なナラティブの形成によって深い自己理解を得たとして、次にすべきことは自分への投資であり、口座に有形資産を蓄積していく投資ではないのではないか。たしかにこのような考え方は、主体的な自己形成を支えるうえで重要なものだろう。しかしここでいう自己投資戦略が、現在の自分の能力という無形資産を直接成長させることにのみ注力するという意味ならば、それはすくなくとも三つのことを見落としている。

第一に、たとえナラティブが深い自己理解をもたらしたとしても、その時点ですべての余剰資金を特定の手段に投じて自分の能力を最大化できると考えるのは、やはり非現実的な想定と言わざるをえない。物語的な自己理解はつねに「続き」への意識とともにある。自分という物語は生きていくかぎり未完であり、進むべき方向を 100 パーセント確信することは通常ありえない。それならば、資金の活用を将来のより適したタイミングへと部分的に先送

りし、その間に自分と社会が自然に成長するのに合わせて、取り置いた資金もゆるやかに増やしておくのがよい。第二に、上述のような意味での自己投資はリスク分散が難しい。自分への投資を株式投資に例えれば、ひとつの個別銘柄を選択して資金を集中させるようなものである。さらに実際の株式投資であれば、ひとつの企業といえども多数の株主やステークホルダーによる集団の知恵で運営されていると言えるが、自分個人の能力にのみ賭ける場合、外部環境の変化への対応が難しい。第三に、「自分への投資」の成果は可視化されにくく、自己の成長を客観的に評価する基準が欠けている。このため、自分がどの程度進歩しているのかを確認しにくく、むしろ成長を後押しする材料が得られない可能性がある。こうした点を考慮すると、自己投資だけに依存する戦略には慎重な検討が必要だといえる。

他方で有価証券への投資は、自分一人では完結せず、他者との関係の中で成り立つ行為である。この点で、投資は単なるタンス預金とは異なる性質をもつ。しかし一般には、投資は自分の資金を自らの能力でコントロールし、その結果として得られる利益を正当なりターンとして享受する行為とみなされがちだ。この視点では、社会課題への対応や道徳的配慮といった経済的リターン以外の要素は「余剰負担」のように感じられ、自分が本来負うべきでない責任のように捉えられることがある。しかし、投資が社会との相互関係の中で成立する以上、そのような想定はあまりにナイーブではないだろうか。

というのも、投資にかんする一般的な想定には、少なくとも二つの自明でない前提が含まれているからである。第一に、「能力の个体主義」⁸、すなわち自分のお金をコントロールする能力が個人としての自分に備わっているという認識である。第二に、この个体主義を前提としたロック的労働所有権論、すなわち「自分個人の能力や労働によって生み出された財産の所有権は、自分に帰属する」という考え方だ⁹。しかし、そもそも投資は、自分の余剰資金を投資先に委ねる行為であり、そこには自分以外の存在、たとえば企業や市場、さらには経済全体との複雑な相互作用が絡んでくる。投資先企業にとってそれは事業を展開するための資金調達だが、その結果は個別の企業だけでなく、社会や経済全体に依存する部分が大い。このように見れば、能力の个体主義やロック的所有権の想定は必ずしも完全には成立しない。

投資が「委ねる」行為であるという側面を、もう少し掘り下げてみよう。投資先企業への資

⁸ 石黒（1998）や樋口（2010）は、能力の个体主義（ないし個体能力主義）を近現代の教育における基底的価値観として批判的に検討している。

⁹ もっとも、自らの労働を「混合する」ことによって所有権が発生するという、『統治二論』第2篇第5章「所有権について」の第27節に見られるロックの議論（Locke, 1988 加藤訳, 2010）は、自然物や土地にかんするものである。またそのような仕方では原始取得の権原が生起するのは、同様の資源が他人にも十分な量だけ残されている（enough and as good left in common for others）という条件、いわゆる「ロック的但し書き（Lockean proviso）」（Nozick, 1974, p. 174ff. 嶋津訳, 1992, p. 295ff.）が当てはまる場合のみとされる。

金提供だけでなく、投資には他にも重要な「委ね先」が存在する。たとえば、市場の基盤形成システムである。これには貨幣システムや証券取引所、中央銀行、証券業、投資運用業といった取引の場やインフラが含まれる。次に、金融監督機関や会計基準といった、公正性と信頼性を担保する仕組みも欠かせない。また、年金基金や金融税制、ESG 基準といった、経済全体の持続的安定性を支える仕組みも重要である¹⁰。投資とは、これら多様なマルチエージェント・システムに、自分の資金だけでなく、行為者性や能力の一部を委譲する (entrust) 行為なのだ¹¹。そのため、金融資産は「つねにすでに (always-already)」公共的性格を内包していると言える。こうした視点に立てば、投資を単なる個人の経済活動として捉えるのではなく、社会や市場との相互関係の中で機能する行為として再評価することが求められる。

以上の議論を踏まえると、「善きしあわせ」とは何かを改めて問い直すことができる。一般的には、幸福とは主観的なものであり、その基準は個々人の生き方や選択に任されていると考えられている。そして、この選択肢は多様であるべきだという前提が広く受け入れられている。それゆえ、この視点では、社会的責任や共通善への考慮は「余剰負担」のように感じられてしまいがちである。しかし、幸福が個人の生き方に根ざすものであるとしても、共通善が必ずしも「余剰」とみなされるわけではないだろう。

というのも、投資が「委ね」である以上、個人の「生の選択」には共通善が不可分に含まれているからだ。投資のリターンが成立する背景には、市場の公正性や効率性を担保する社会制度の健全な機能が欠かせない。これらの制度は、分配的正義、すなわち本人の功績に応じて取り分を定める規範にもとづき、市場を超えた枠組みで実現される。また、投資先の企業や産業が長期的に成長するには、経済全体の安定的な発展が必要である。したがって、投資は個人の幸福（わたしの幸福）だけでなく、経済や社会という「われわれ性」の潜在的公共性を実質化する行為とも言える。このように考えると、投資において「善きしあわせ」を追求するとは、個人の価値観に基づいた具体的な選択を行いつつ、その選択が社会全体の利益と調和するよう模索することであると言えるだろう。

こうした資産形成の「われわれ性」を自覚し、投資をつうじて「善きしあわせ」を目指すという考えかたは、個人の幸福を制約したり、あきらめたりすることを意味しない。それはむしろ、私たちがさまざまなメディアをつうじて受けとり、無意識のうちに内面化した他人の

¹⁰ 川北 (2004) は、効率的な証券投資に必要な社会的インフラストラクチャーとして、(1) 情報開示 (ディスクロージャー)、(2) 証券取引情報の伝達、(3) 証券決済、そして (4) 委託者および受託者の権利と義務を定める社会的ルールの整備を挙げている。

¹¹ 投資に限らず、「自転車漕ぐ」といったあらゆる身体的行為は「わたし (I)」だけではできず、人間、人工物、生物、無生物など多種多様なエージェントの貢献によって成立する。このとき自転車漕ぎという行為者性は、それら無数のエージェントに委ねられており、その行為の主体は、「われわれ (WE)」と呼びうるマルチエージェントシステムなのである (出口, 2022; 出口, 2023; Deguchi, 2023)。

ナラティブから、自分自身をいったん取り戻すことにほかならない。そのような他人のナラティブのひとつに、「ライフプランニングとシミュレーション」といった文句がある。また、人生の目標や自己実現にかんして「5年後までにマンション購入の頭金として500万円貯める」といった形式での「ライフデザイン」のすすめが世間にはあふれている。こうした数値は指標としては機能するが、あくまで目安に過ぎない。たしかに、期間目標や生涯収支を「見える化」することによって、自分が置かれた現状と、自分に思い描くことが許された未来を客観視することができるかもしれない。しかし、身近でわかりやすいという理由で手に取った物差しで人生を計ろうとすれば、本質を捉え損なうこともある。見定めるための基準は必要だが、その物差しがずれたままだと、評価や判断を誤り、偏見が強化されてしまう。そうならないためにも、ライフ・インテグレート尺度で自分の価値観をひらき、幸福観の一樣でなさを確認し、自己理解のナラティブを調整しつづけていくことが重要である。

「しあわせ」は自分の経験の総体によってかたちづくられ、そこには自分に届けられた他者の声もしみ込んでいる。幾重もの記憶の層によって磨かれた他者の声は、はっきりとした輪郭をとどめていないかもしれない。しかしそこに耳を澄ませるからこそ「自分はどうのようにしてマンション購入という欲求を抱くようになったのか」などと、価値にかんする問いに想いを馳せることができる。そのような能動的自省において人は、「わたしのなかのわれわれ」に出会うことになるだろう。

5. おわりに：「われわれ」の拡張と資産継承

以上に述べてきた本研究の考察の過程を、簡潔に要約しておこう。私たちの第二期共同研究は、「人が投資をするとはどういうことか」という問いを出発点としていた。ここには金融機関と哲学者、それぞれの問題意識が込められている。金融機関としては、なぜ日本では多くの人びとが貯蓄から投資に踏みだすことを躊躇し、とりわけ長期投資の習慣が根づかないのかという疑問があった。他方で哲学者としては、ロングタームでの経済的意思決定に固有の難しさとはなにか、という関心があった。そこでまず、長期の資産形成においては目標設定による合理的なアプローチが必ずしも機能しないという事態を「ゴール投資のパラドクス」として定式化した。そのうえで代替アプローチを探るため、資産形成が自己形成とかわり、そのプロセスが原理的に他者と公共世界にひらかれている点に着目した。資産形成も自己形成も「つくる」行為である。金融資産は現在の自己の潜在能力を部分的に外化したものであり、未来の自己をつくる素材となる。それゆえ資産形成と自己形成というふたつの制作行為は、互いを充実させながら循環的に進んでいく関係にある。この相互作用ゆえに、自己をひとつの物語として理解しようとするとき、そこには資産についての語りも必然的に編み込まれる。同時に、資産には自己の物語が反映する。そして資産として外化された自

己の潜在能力は、投資という「委ね」のシステムをつうじて他者の活動の源泉となり、未来において再び自己に内化されるのである。

「委ねる」という投資の本質が教えてくれるのは、資産と自己の循環関係、またそこに「しあわせ」を加えて描かれる円環に、他者が含まれているという事実である。自分自身の幸福の実現にかかわっている他者といえば、家族や友人など身近な人びとがまず挙げられる。さらに職場の仲間や地域の知り合いまで自然に含まれるかもしれない。投資という「委ね」のシステムは、このような人間的紐帯を、想像において拡張する契機となりうる。しかし想像力がリアルにおよぶ範囲を、どこまで、そしてどのように拡大することができるだろうか。その人の幸福の実現が自らの幸福の実現の一部として感じられるような「われわれ」の拡大は、まず地理的な次元において考えられよう。私たちの経済活動は、環境破壊や生態系の損失をつうじて、地域的に遠く離れた他者の生活の質や生存可能性に対して負の外部性をもたらす。たとえば、日本や欧米諸国の企業および消費者の行動は、国境を越えて遠隔地の人々の生活環境を脅かす場合がある。気候変動の地球規模での影響、またグローバル・サプライチェーンの拡大などを考えたとき、道徳的な配慮（すなわち享受すべき幸福への配慮）がおよぶべき「われわれ」の範囲は、地理的により広範なものへと拡張される。

さらに、「しあわせ」のサークルは時間的次元にも拡張しうるだろう。というのも、現在の人類の活動は、将来世代の生存環境や生活の質に深刻な影響をおよぼす可能性を孕んでいるからである。こうした未来世代に対する道徳的配慮を奨励する立場としては、「長期主義（longtermism）」という思想運動が近年論議を巻き起こしている。「長期的な未来に対して肯定的な影響を与えることが、現代における主要な道徳的優先事項のひとつである」（MacAskill, 2022 千葉訳, 2024, p. 12）とするこの立場は、ウィリアム・マッカスキルが効果的利他主義（effective altruism）の時間的拡張として包括的に論じたことで、にわかに注目を浴びた¹²。効果的利他主義はたんに利他的行動を奨励するだけでなく、客観的な証拠と推論にもとづき、もたらしうる善（すなわち正の社会的インパクト）を最大化するような手段をとることを要請する（MacAskill, 2015 千葉訳, 2018）。ベースとしては至極穏当な長期主義の主張がときに批判を呼ぶのも、どんな行動（たとえばどの慈善団体に寄付するか）が将来における最大の帰結をもたらしうるかを、現在のデータや推論から合理的に見定めうる、という想定が受け入れがたく感じられることもあるからだろう。未来に存在するかもしれないすべての人を道徳的配慮の対象に入れるべきだという主張もまた、長期主義を途方もない企てのように感じさせている。

長期主義に対するこうした懸念が正鵠を得たものかどうかについて、いま議論する余裕は

¹² 長期主義と効果的利他主義は功利主義の実践的応用とみなされることがあるが、奥野（2024）はそのような理解に異議を唱え、マッカスキルが唱導するそれらの思想が功利主義とは根本的な点で異なると主張している。

ない。しかし、もしそこで突きつけられているような倫理的選択に圧倒されて、投資をつうじた「善きしあわせ」など理想主義のように感じ始めたならば、代わりにここで人類学者のアネマリー・モルが論じた「ケアのロジック」について思い起こしておくことは有用だろう (Mol, 2008 田口・浜田訳, 2020)。たとえば治療法にかんして患者自身が意思決定する場合など、近代社会では、自律的な選択こそ望ましいと一般的には想定されている。たしかに自由な選択は、強制や抑圧に比べればずっとよいものだ。しかしモルは、自分のことは自分で選択してしかるべきという「選択のロジック」に疑義を差し挟む。というのも、選択に際しての判断材料がいつも与えられているとはかぎらないし、人間はつねに自律的存在であるという見方が誤った先入観にほかならないからだ。それなのに、私たちは否応なく選択を迫られ、自己責任の名の下にその帰結を受け入れさせられる。そのような「選択」の欺瞞的押しつけに代わるのが「気づかい」すなわち「ケア」のロジックである。ケアの善し悪しは、行為に先立って定義されるものではない。まず相手を気づかう具体的な行為があり、それをより善いものにしようと手探りの試みが続く。そのような現実の試みは不確実性や不一致であふれており、いちど明らかになった「善さ」も、つねに調整され「手直し (doctoring)」 (Mol, 2008, p. 55 田口・浜田訳, 2020, p. 127) されていく。ケアのロジックにおいて「善さ」は、予め突きつけられる基準や目標ではなく、あくまで実践の一部なのだ。

「われわれ」の未来への拡張によって「善きしあわせ」を目指す投資も、ケアのロジックで考えれば少し見え方が変わってくるかもしれない。未来の人びとは、現在世代の構成員間のような、ギブ・アンド・テイクの関係が成立しない。よきにつけあしきにつけ、私たちはかれらに一方的な影響を与えうる立場にあり、ここには力の不均衡が存在する。ハンス・ヨナスは、この圧倒的な力の不均衡のゆえに現在世代には未来世代への責任が発生すると考えた。自分を守る術をもたない赤子に対して保護する責任が大人にはあるように、ここでの責任の基礎は、潜在的な善の最大化ではなく、弱い者への気づかいにある (Jonas, 1979 加藤監訳, 2000)。すると「善きしあわせ」を目指す投資は、未来世代への気づかいを契機とすることもできる。モルによれば、具体性と実践を重視するのがケアのロジックである。それゆえそうした気づかいを、自分にとって具体的な質感をもった近い相手に向けることは自然であり、資産形成という文脈におけるケアの最もシンプルな表現は子や孫への「相続」ということになるかもしれない。ただし善きしあわせを目指して形成された資産によって受け継がれるのは、資産の額面だけではない。それがどのような価値観にもとづいて築かれたかというポートフォリオのあり方をつうじて、他者や社会への態度や期待も継承することができる。このように考えると、自分の子や孫の生活を気づかう心が、さらに未来の世代が生きる社会や環境への顧慮につながっていくのはそれほど難しいことではない。そのとき投資によって未来に委ねられるのは、お金だけでなく「善きしあわせ」のかたちそのものでもあり、「わたし」という物語は、そこにおいて「われわれ」の物語へとふたたび合流していくのである。

参考文献

- Ackrill, J. L. (1965). Aristotle's distinction between *energeia* and *kinesis*. In R. Bambrough (Ed.), *New essays on Plato and Aristotle* (pp. 121-141). Routledge.
- アリストテレス (1968). 『形而上学』 (出隆訳), 岩波書店.
- アリストテレス (1973). 『ニコマコス倫理学』 (加藤信朗訳), 岩波書店.
- Bruner, J. S. (2002). *Making stories: Law, literature, life*. Harvard University Press.
- Carr, D. (1991). *Time, narrative, and history*. Indiana University Press.
- 出口康夫 (2022). 「思想の言葉『できなさ』から WE ターンへ」『思想』1179, 2-5.
- 出口康夫 (2023). 『AI 親友論』, 徳間書店.
- Deguchi, Y. (2023). From incapability to WE-turn. In Zwitter, A., & Dome, T., (Eds.) *Metascience: Towards a science of meaning and complex solutions*. (pp. 43-71). University of Groningen Press.
- 出口康夫 (2024). 「デネットを WE ターンする—『有用な虚構としての自己』から『多層的わたし』へ—」『現代思想』52(13), 197-209.
- Dennett, D. C. (1991). *Consciousness explained*. Little Brown & Company (山口泰司訳『解明される意識』, 青土社, 1998).
- Fisher, W. R. (1984). Narration as a human communication paradigm: The case of public moral argument. *Communication Monographs*, 51(1), 1-22.
- 藤澤令夫 (1980). 「現実活動態 (上): アリストテレスにおけるキーネーシス (あるいは運動の論理) とエネルゲイア (あるいは活動の論理) との対置について」『哲学研究』46(9), 763-797.
- 樋口太郎 (2010). 「能力を語ること—その歴史的、現代的形態」松下佳代編著『〈新しい能力〉は教育を変えるか: 学力・リテラシー・コンピテンシー』(pp. 45-79). ミネルヴァ書房.
- 石黒広昭 (1998). 「心理学を実践から遠ざけるもの: 個体能力主義の興隆と破綻」佐伯胖・宮崎清孝・佐藤学・石黒広昭編『心理学と教育実践の間で』(pp. 103-156). 東京大学出版会.
- Jonas, H. (1979). *Das Prinzip Verantwortung: Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*. Insel (加藤尚武監訳『責任という原理—科学技術文明のための倫理学の試み—』, 東信堂, 2000).
- 川北英隆 (2004). 「投資運用業の現状と将来」堀内昭義・池尾和人編『日本の産業システム 9 金融サービス』(pp. 200-252). NTT 出版.
- 鬼界彰夫 (2011). 『生き方と哲学』. 講談社.
- Locke, J. (1988). *Two treatises of government*. Cambridge University Press (加藤節訳『完訳

- 統治二論』, 岩波書店, 2010).
- McAdams, D. P. (1985). *Power, intimacy, and the life story: Personological inquiries into identity*. Dorsey Press.
- MacAskill, W. (2015). *Doing good better: Effective altruism and how you can make a difference*. Random House (千葉敏生訳『効果的な利他主義』宣言!—慈善活動への科学的アプローチ』, みすず書房, 2018).
- MacAskill, W. (2022). *What we owe the future*. Basic Books (千葉敏生訳『見えない未来を変える「いま」—〈長期主義〉倫理学のフレームワーク』, みすず書房, 2024).
- MacIntyre, A. (1984). *After virtue: a study in moral theory*. 2nd ed., University of Notre Dame Press (篠崎榮訳『美德なき時代』みすず書房, 1993).
- 三浦洋 (1997). 「アリストテレスの『エネルゲイア』と『キーネーシス』の区別に関する一考察」『西洋古典学研究』45, 72-83.
- Mol, A. (2008). *The logic of care: Health and the problem of patient choice*. Routledge (田口陽子・浜田昭範訳『ケアのロジック—選択は患者のためになるか』, 水声社, 2020).
- 西田幾多郎 (2020). 『西田幾多郎講演集』(田中裕編). 岩波書店.
- 野家啓一 (1994). 「歴史の中の身体—西田哲学と現象学—」上田閑照編『西田哲学: 没後五十年記念論文集』(pp.75-100). 創文社.
- 野家啓一 (2007). 「ホモ・ナランスの可能性」野家啓一編『ヒトと人のあいだ 6』(pp. 1-33). 岩波書店.
- Nozick, R. (1974). *Anarchy, state, and utopia*. Basic Books (嶋津格訳『アナーキー・国家・ユートピア: 国家の正当性とその限界』木鐸社, 1992).
- 奥野満里子 (2024). 「思想に人生を捧げる前に—長期主義と功利主義の間の齟齬について—」『現代思想』52(11), 87-101, 青土社.
- Ricoeur, P. (1985). *Temps et récit, III, Le temps raconté*. Seuil (久米博訳『時間と物語 III—物語られる時間』, 新曜社, 1990).
- Ricoeur, P. (1990). *Soi-même comme un autre*. Seuil (久米博訳『他者のような自己自身』, 法政大学出版局, 1996).
- 社団法人日本経営工学会編 (2002). 『生産管理用語辞典』. 日本規格協会.
- Shiller, R. J. (2019). *Narrative economics: How stories go viral and drive major economic events*. Princeton University Press (山形浩生訳『ナラティブ経済学: 経済予測の全く新しい考え方』東洋経済新報社, 2021).
- 高橋泰城 (2017). 「価値の時間割引と自己同一性」信原幸弘編著『時間・自己・物語』(pp. 235-261). 春秋社.
- Taylor, C. (1989). *Sources of the self: The making of the modern identity*. Harvard University Press (下川潔・桜井徹・田中智彦訳『自我の源泉』, 名古屋大学出版会, 2010).